

宋之問論(下)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高木, 重俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003372

宋之問論（下）

高 木 重 俊

四

宋之問は再び京官となり、中宗の朝に立つことになった。その神龍二年（七〇六）十月、中宗は長安に帰り、宋之問も長安を活動の舞台とする。『唐会要』卷六四「史館下・宏文館」の条に、景龍二年（七〇八）五月五日に戸部員外郎宋之問を修文館直学士にした旨の記載があり、彼は神龍二年三月に鴻臚寺主簿（従七品上）となつてまもなく、戸部員外郎（従六品上）に転じたことがわかる。『旧唐書』「韋湊伝附韋虚心伝」には、韋虚心の父の維が戸部郎中として剖判を善くし、員外郎の宋之問が詩に工みであつたところから、戸部に二妙ありと称された話が載っている。宋之問の詩才は、中宗朝でも評価され、それによつて修文館直学士に任じられたのである。また、彼の「祭杜学士審言文」は「維れ大唐の景龍二年、歳次戊申、月日、考功員外郎宋之問、謹みて清酌の奠を以て、敬みて故修文館学士杜君の靈を祭る」と書き出され、文末には「孟冬十日、共に君を帰る、君に靈あらば、聞くや聞かずや」という記述がある。宋之問とともに修文館直学士となつた杜審言は、景龍二年十月に世を去つた。こ

の祭文によれば、宋之問はこの年の秋ごろに考功員外郎（従六品上）に転じたことになる。官階からすれば横すべりであるが、戸口や土田などを掌る前部に比べて、文武百官の功過を査定する吏部考功曹の方が官職としては重い。『新唐書』本伝では、彼が考功員外郎を得たのは、大平公主に詔事したお蔭であると言う。

そうした事情はともかく、彼はこの年に貢挙を知して、「後進を引抜して、名を知らるる者多し」（『旧唐書』本伝）と称される仕事をする。『旧唐書』「韋述伝」には、韋述が宋之問によつて進士科に登第したと記す。

こうした官僚としての働きもさることながら、彼の名がこの時期により高く喧伝されるのは、前の武后朝におけるのと同じく、「詞人」としての活躍による。彼は修文館直学士に任じられて、一流詞人の地位を確保した。

前述した『唐会要』卷六四によると、修文館は高祖の武徳四年（六二一）に初めて設置され、のち、宏文館、昭文館と改められて、神龍二年にもとの修文館に呼称を復している。景龍二年四月二十二日、中宗は修文館に大学士四員・学士八員・直学士十二員を増置し、「文を攻むるの士」を徴してこれに充てた。各学士の任命は逐次行われ

たようである。

大学士 (四月二十三日) 中書令李嶠・兵部尚書宗楚客

学士 (四月二十五日) 秘書監劉憲・中書侍郎崔湜・吏部侍郎

岑義・太常卿鄭愔・給事中李適・中書舍人盧藏用・同李義・

太子中允劉子元

〔十月四日〕兵部侍郎趙彦昭・給事中蘇頌・起居郎沈佺

期

直学士 (五月五日) 吏部侍郎薛稷・考功員外郎馬懷素・戸部員

外郎宋之問・起居舍人武平一・国子主簿杜審言

俊 大学士四員・学士八員・直学士十二員という構成は、四時・八節・

十二月に象つたものであるが、『唐会要』に記す人数は、この定員に

合致しない。ただ、大学士・学士・直学士の発令は、当初、おおむ

ね官階の高い順に行われたことがわかる。そして、十月四日に追加

発令されたところから、内部の移動も行われたと考えられる。

『唐詩記事』巻九「李適」の条にも学士名が記されている。それは

次の通りである。

大学士 李嶠・宗楚客・趙彦昭・韋嗣立

学士 李適・劉憲・崔湜・鄭愔・盧藏用・李義・岑義・劉子玄

直学士 薛稷・馬懷素・宋之問・武平一・杜審言・沈佺期・閻朝

隱・韋安石・徐堅・韋元旦・徐彦伯・劉允濟

このうち、直学士の徐堅以下の四名は後に追加されたものである。

『唐詩記事』の記載は各学士の定員をきちんと満たしているとは言

え、『唐会要』に学士として記される蘇頌は『唐詩記事』には見えな
い。しかし、両唐書本伝にはともに修文館学士を加えられたとあり、
後の表に示すように、中宗の景龍四年に至るまでの間に多くの応制
詩を残しているから、学士の身分を保持していたと思われる。両資
料のくい違いは、学士の死亡・外職への転出などにより、内部で移
動補充が行われた事実を示すと理解される。

『旧唐書』「上官昭容伝」に「婉兒 常に広く昭文の学士を置くを
勧め、盛んに当朝詞学の臣を引き、数しば遊宴を賜はり、賦詩唱和
せしむ」と言い、『新唐書』本伝にも「婉兒 帝に書館を侈大にし、
学士の員を増し、大臣名儒を引き選に充つるを勧む」と言うよう
に、修文館学士の増員は上官婉兒の発議と勸懲によるものであった。
彼女と修文館学士を中心とする景龍年間の宮廷文壇の活動は、『資治
通鑑』「景龍二年」の条に、

每遊幸禁苑、或宗戚宴集、學士無不畢從、賦詩屬和。使上官昭
容第其甲乙、優者賜金帛。同預宴者、惟中書門下及長參王公親貴
數人而已。至大宴、方召八座九列諸司五品以上預焉。於是天下靡
然爭以文華相尚、儒學忠讜之士莫得進矣。

と記されるに至る。この背景に中宗の文学愛好があるのは言うま
でもないが、上官婉兒の存在もまた大きなものであった。彼女は、
高宗の龍朔年間(六六一―六六三)に「上官体」と称される華麗な
詩風によって一世を風靡した宰相上官儀の孫娘であり、麟徳元年(六
六四)に祖父の上官儀と父の庭芝が誅せられたのち、母とともに掖
庭に配せられてそこで育ち、文章の才をもって武后に目をかけられ
た。中宗の即位ののちにその婕妤となり、韋后と結び、武三思や崔

湜らの宰臣と私通して政事を動かすに至った。その上官婉児の意に添って修文館学士の増員が行われ、頻繁に催される詩宴で詩の判者をつとめたわけであるから、彼女がこの時期の宮廷文壇の事実上の主宰者であったと言つてよい。彼女は景龍二年（七〇八）十一月に婕妤から昭容に昇進し、ますます文壇と政事に対する影響力を強めて行つた。彼女は宴席でみずから詩を賦するのみならず、中宗や韋后、長寧公主や安樂公主の詩の代作をした。彼女の詩風を『旧唐書』本伝では「綺麗」と言い、『新唐書』本伝では「采麗」と評する。祖父の上官儀の詩風を受け継ぐものである。宮廷文壇の中心人物の詩風がこうであれば、これが文壇全体に行きわたり、美麗ではあるが内容の空疎な詩が量産されるのは必然の成り行きである。ただ、『新唐書』本伝では、「当時の辞を属する者、大抵は浮靡なりと雖も、然れども得し所みな観るべきものあるは、婉児の力なり」と、文壇の事実上の主宰者である彼女の力量を、一応評価している。のちに玄宗は、誅殺された彼女の詩文を集めて二十巻の文集とし、張説にその序を書かせた。

宋之問はこの文壇の実力者のために、「故趙王属贈黄門侍郎上官公挽詞」二首を作っている。上官婉児が中宗の婕妤となつたとき、祖父の上官儀に中書令、父の庭芝に黄門侍郎が追贈された。これはその折に上呈された五言律詩である。「其一」の前半は次のようにうたわれる。

韋門旌舊德　　韋門　旧徳を旌はし
班氏業前書　　班氏　前書を業とす
謫去因丞相　　謫去は丞相に因りしも
歸來爲婕妤　　歸來　婕妤の爲なり

ここではまず上官儀・庭芝の父子を、漢の宰相であつた韋賢・玄成父子、後漢の史官であつた班彪・固父子になぞらえてその学芸を讃え、宰相上官儀に連坐して謫去せられたが、その名誉回復は上官婕妤のお蔭であると述べる。婕妤の父の庭芝への挽詞であるが、念頭には婕妤が置かれていたのである。宋之問は、宮廷文壇の実力者に阿諛の辞を捧げつつ、宮廷詩人群の驥尾に付していたわけである。

さて、この宮廷詩人群の活動は、中宗の景龍二年から三年にかけて、宮中の行事の際のみならず、公主や重臣の邸宅、長安近郊の名所などを宴集の場として、極めて盛大に行われた。こうした動きは『唐詩記事』巻九「李適」の条に詳細に録されているが、それを中心に、新旧唐書や『資治通鑑』、『唐音癸籤』巻二七や『全唐詩』などの資料をもとに、宴集の場所（あるいは名目）と参列賦詩の人名を表示したのが次の表Ⅰである。紙幅の関係で詩数の多い二十二名を取り上げたが、これらの人物だけで景龍文壇の大勢を十分に知ることができる。詩人の配列は便宜的なものである。また、本表に掲出したのは、数ある宴集の中でその日時や場所（名目）を特定でき、かつ、その場における作品が残っているもののみであるが、それでも、この数にのぼる。とりわけ、景龍二年の重陽の慈恩寺、翌年重陽の臨渭亭の賜宴では、それぞれ二十七名、二十六名が作品を残しており、史上稀有の大詩宴と言つてよい。景龍の宮廷文壇の活動は、六朝の詩風を色濃くにじませた初唐の時代をしめくくる最後の輝きなのであった。

表Ⅰの○印は作品があるもの、△印は詩型が違ふもの、？印は作品の重複あるいはその作者の作品でないものを示す。表Ⅱはその場における一般的な詩題を掲げた。なお遺漏の多からんことを危惧する。

表
I

景 龍 三 年 (709)											景 龍 二 年 (708)									
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番 号
11/1	9/9	8/13	8/11	2/11	2/8	1/29	1/15	1/8	1/7	1/7	12/30	12/30	12/21	12/6	11/15	10/3	閏9/9	9/9	7/7	月 日
安樂公主新宅	臨渭亭	太平公主山亭	送張仁亶	太平公主南莊	送沙門	晦日・昆明池	薦福寺	立春・賜綵花	人日遊苑遇雪	人日・清暉閣	守藏	長安故城未央宮	臨渭亭	大薦福寺	中宗誕日	三會寺	總持寺浮図	慈恩寺浮図	兩儀殿	場所 名目
五言8句	五言8句	七言8句	五言12句	〃	五言8句	〃	五言12句	五言8句	七言絶句	五言8句	七言8句	五言12句	五言8句	五言12句	七言聯句	五言12句	〃	〃	五言8句	詩 型
								○							○	○		○		①上官昭容
	○	○	○	○	○			○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	②李嶠
			?					○	○	○		○		?	○	?	○	○	○	③劉憲
	○		○	○		○		○		○			○		○				○	④蘇頌
	○		○	○	○	○				○		○	○	○	○	○	○	○	○	⑤李乂
○	○			○	?	○		○	○		○									⑥沈佺期
	?			○		○	○	○	○			○		○	○	○	○	○		⑦宋之問
○	○			○				○	○	○		○		○	○			○	○	⑧趙彦昭
	○														○			○		⑨盧藏用
	○																	○		⑩岑羲
	○														○			○		⑪馬懷素
	○		?				○		○					?		?		○		⑫蕭至忠
														○	○	○		○		⑬鄭愔
															○		△			⑭崔湜
○	○												○		○			○		⑮李適
									○				○							⑯徐彦伯
○										○					○					⑰宗楚客
	○																			⑱閻朝隱
	○																			⑲韋元旦
	○														○					⑳薛稷
○								△												㉑武平一
																				㉒張說
	十三名	三名		三名					趙彦伯						中宗他一名			他十五名	杜審言	そ の 他

宋之問論 (下)

景 龍 四 年 (710)													景 龍 三 年 (709)									
42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	
4/6	4/1	3/?	3/11	3/8	3/3	3/1	2/21	2/1	1/29	1/7	1/5	1/1	12/28	12/15	〃	12/14	12/12	12/4	11/15	?	?	
興 慶 池	長 寧 公 主 東 莊	望 春 宮	昭 容 別 院	寶 希 玠 宅	祓 禊 渭 濱	梨 園 亭 觀 打 毬	桃 花 園	送 金 城 公 主	晦 日 澹 水	人 日 ・ 大 明 宮	大 明 殿	賜 柏 葉	登 驪 山	白 鹿 觀	〃	韋 嗣 立 山 莊	新 豐 溫 泉 宮	立 春 遊 苑	中 宗 誕 日	安 樂 公 主 山 莊	〃	
七言8句	五言8句	七言8句	五言8句	五言12句	七言絕句	五言8句	七言絕句	〃	五言8句	七言8句	七言聯句	五言絕句	〃	五言8句	七言絕句	五言16句	五言長篇	七言8句	五言8句	七言8句	七言絕句	
①											○						△					
②		○					○	○		○			○	○	○	○			○			
③	○	○	○		○	○		○					○	○	○	○				○	○	
④	○		○		○		○	○		○			○	○	○	○				○	○	
⑤	○	○	○		○	○		○		○		○	○	○	○	○				○	○	
⑥	○		○		○	○		○	○	○				○	○	○		○		○	○	
⑦																?						
⑧							○	○		○		○	○	○	○					○		
⑨																		○		○	○	
⑩			○																	○	○	
⑪	○		○					○		○								○		○	○	
⑫																				○		
⑬		○	○	○				○		○	○								○			
⑭		○	○			○		○		○			○	○	○	○						
⑮	○	○	○					○		○								○		○		
⑯	○				○		○	○						○		○	△				○	
⑰									○											○		
⑱			○					○		○			△					○			○	
⑲	○		○					○		○								○		○	○	
⑳			○					○												○	○	
㉑	○					○		○			○	○	○	○	○	○	△				○	
㉒	○		○		○			○	○					○	○	○	○					
	蘇 瓌				韋 嗣 立		趙 彥 伯				中 宗 他 八 名		中 宗					中 宗		李 迥 秀	李 迥 秀	

表 II

1	奉和七夕兩儀殿會宴應制	11	苑中（人日）遇雪應制	21	夜宴安樂公主新宅	32	奉和人日重宴大明宮恩賜綵樓人勝應制
2	奉和九月九日登慈恩寺浮圖應制	12	奉和立春日侍宴內出剪綵花應制	22	奉和幸安樂公主山莊應制	33	（正月晦日）侍宴滹水應制
3	奉和閏九月九日幸總持寺浮圖應制	13	奉和薦福寺應制	23	中宗降誕日長寧公主滿月侍宴應制	34	奉和送金城公主適西蕃應制
4	奉和幸三會寺應制	14	奉和晦日幸昆明池應制	24	奉和立春遊苑迎春應制	35	侍宴桃花園詠桃花應制
5	誕辰內殿宴群臣效柏梁體聯句	15	送沙門泓景道俊玄奘還荊州應制	25	奉和幸新豐溫泉宮應制	36	幸梨園亭觀打球應制
6	奉和幸大薦福寺應制	16	奉和初春幸太平公主南莊應制	26	奉和幸韋嗣立山莊侍宴應制	37	上巳日祓禊渭濱應制
7	遊禁苑陪幸臨渭亭遇雪應制	17	奉和幸望春宮送朔方總管張仁宣	27	奉和聖製幸韋嗣立山莊應制	38	奉和聖製幸禮部尚書寶曆宅應制
8	奉和幸長安故城未央宮應制	18	太平公主山亭侍宴應制	28	幸白鹿觀應制	39	奉和幸上官昭容院獻詩
9	守歲侍宴應制	19	奉和九日幸臨渭亭登高應制	29	奉和登驪山高頂寓目應制	40	奉和春日幸望春宮應制
10	奉和人日清暉閣宴群臣遇雪應制	20	安樂公主移入新宅侍宴應制	30	元日恩賜柏葉應制	41	侍宴長寧公主東莊應制
				31	移杖蓬萊宮御大明殿會吐蕃騎馬之戲	42	興慶池侍宴應制

〔補説〕

一、151926については、宋之間にも作品があるが、1519は李嶠の作と、26は李義の作と同一である。安東俊六氏は、これらは宋之間の作ではなく、それぞれ李嶠・李義のものと論証された。妥当な見解である。

二、12について、『唐詩記事』「李適」の条によると、景龍四年一月八日の立春の日に内殿より綵花を賜わった時の宴集であるとするが、平岡武夫編『唐代の暦』によれば、景龍二年の冬至が十一月二日、同三年の春分が二月四日で、これから計算すると景龍三年一月八日が立春となる。したがって、「景龍四年」と『唐

詩記事』に言うのは、「景龍三年」の誤り。因みに、景龍四年の立春は、景龍三年の十二月二十八・九日である。年の内に春が来たものである。

さて、話を本筋に引きもどさなければならない。前表によれば、宋之間が景龍二年五月に修文館学士となって初めて参列した宴集は、確認しうるところではこの年の九月ということになる。十月に学士となった沈佺期よりも、彼は中宗朝においては先んじたわけである。そして、確認しうる最後の應制詩が翌年二月の太平公主の南莊におけるものであるから、彼が名実ともに第一級の宮廷詩人として中宗朝で活躍したのは、わずか六カ月の期間であったと言ってよ

い。この間、彼は太平公主や上官婉児、武三思やその子の武崇訓に阿附した。神龍三年七月に武三思父子が節愍太子(李重俊)に誅殺されると、ただちに「梁宣王挽詞」三首、「魯忠王挽詞」三首を作り、それぞれの遺徳を讃えたりもしている。

宋之問は太平公主に諂事したおかげで考功員外郎を得た、とは、『新唐書』本伝の記事であったが、彼はそののち、太平公主から離れて安樂公主に接近する。安樂公主は中宗の末娘で、父の厚い寵愛を受け、内宮で勢力を拡大していた。彼の変節が太平公主の不興を買い、彼は収賄を理由に地方官へと転出させられる。『新唐書』本伝には、

中宗將用爲中書舍人、太平發其知貢舉時賂餉狼籍、下遷汴州長史、未行、改越州長史。

と言う。この記事では、宋之問が汴州に着任しないうちにさらに越州に遷されたことになるが、これについて安東俊六氏は、

- (1) 景龍三年二月十一日の太平公主の南莊における詩を最後に、彼に応制詩が残っていない。
- (2) 李夔なる人物に「使至汴州喜逢宋之問」詩があり、宋之問には「答李司戸夔」詩があり、その酬答の場合は春の汴州である。
- (3) 宋之問が越州に赴いたのは景龍三年秋である。

などから、宋之問は越州長史に改められる前に汴州長史に着任していたと考えなければならないとされる。

彼が汴州に左遷されたのち、さらに越州に再左遷された背景には

何があつたのか。『資治通鑑』「景龍三年九月」の条には、「太平・安樂公主、各おの朋党を樹て、更ごも相譖毀し、上これ患ふ。」とある。太平派と安樂派の党争は中宗の悩みの種となるほどだったわけだ、宋之問の越州への再左遷も、その余波を受けてのことと考えられる。かくして彼は、汴州長史(從五品上)から越州長史(正六品上)へと格下げになり、広陵(揚州)を経由して越州へと向かう。途中、広陵で、彼はみづから考功員外郎として貢挙を知し、進士に及第させた韋述に逢った。韋述はここで「広陵送別宋員外佐越・鄭舍人還京」詩を作っている。宋之問が越州の次官として赴任し、鄭某(鄭愔?)が長安に帰る、合同の送別の宴における作品である。彼はこの中で宋之問を「文章南のかた越に渡る」とうたっている。この詩は「秋風と客思と、川上晩れて蕭々たり」と結ばれ、季節が秋であることを示している。

宋之問はまたこの地で「傷王七秘書監、寄呈揚州陸長史、通簡府僚、広陵以広好事」詩を作って、秘書監王珣の逝去を傷むとともに、みづからのこの旅を「我、会稽郡に行かんとして、路に広陵の東に出づ」と述べている。

長江を渡った彼は、蘇州丹徒県の県令李某の歓迎を受け、「酬李丹徒見贈之作」を残す。彼はその末尾で、

以予慚拙宦	予宦に拙なるに慚づるを以て
期子遇良媒	子の良媒に遇ふを期せん
贈曲南鳧斷	贈らるる曲には南鳧 こころちぎ 断れ
征途北雁催	征く途は北雁 うなづ 催す
更憐江上月	更に憐れむ江上の月の
還入鏡中開	還た鏡中に入りて開くを

とうたう。ここで彼はみずからの処世の拙さを慚じてはいるものの、これまでしてきた保身のための権貴への阿諛や裏切りについて、どの程度の自責の念が込められているかは読み取れない。李某が「良媒」に出逢うことを願っているが、みずからも同じ心情であっただろう。しかし、五十路を過ぎての左遷であり、長江に浮かぶこの月が、越の鏡湖に映る月に替わることを思う哀愁は、偽りのないところであろう。こうして彼は紹興に到る。景龍三年（七〇九）秋のことであった。

五

越州に着任した宋之間は、ただちに禹廟に謁する。「祭禹廟文」は「維れ景龍三年、歲次己酉、月日、越州長史宋之間、謹みて清酌の奠を以て、敢て夏后の靈に昭告す」にはじまり、自分が夏禹ゆかりの地に赴任して来たことを述べたあと、「先王の心たる、享くるは是れ明德のみ。後の政に従ふもの、斯の姦慝を忌む。……上帝の休佑に謁し、下人の蘇息を期せん」と、大禹の為政を継承すべき決意を記す。この決意は「謁禹廟」詩でも、

下車霰已積 車より下りれば霰すでに積もりたるも
攝事露行濡 事を摂すれば露ゆくゆく濡さん
人隱冀多祐 人の隠める 祐多からんことを冀ふ
曷唯霑薄軀 曷ぞ唯だに薄軀を霑すのみならんや

のようにうたわれる。彼はこの決意のままに熱意をもって州政に

取り組んだようで、『新唐書』本伝では「頗自る力めて政を為す」と評価される。

しかし、一方ではまた、「郡宅中齋」詩で、

王子事黄老 王子は黄老を事とし
獨樂恣遊衍 独楽 遊衍を恣にす
謝公念蒼生 謝公は蒼生を念ひ
同憂感推薦 同憂 推薦に感ず

と、逸民として生きた王羲之と蒼生を救うために世に出た謝安との、会稽の先人の両様の生き方を示し、出仕と退棲との間に葛藤するみずからのこの心情を「称心寺」詩の後半で次のようにうたう。

問予金門客 予に問ふ「金門の客
何事滄洲畔 何ぞ滄洲の畔を事とす」と
謬以三署資 謬つに三署の資を以てし
來刺百城半 来りて百城の半に刺たり
人隱尚未弭 人の隠み尚はいまだ弭まず
歲華豈兼玩 歳華 豈に兼ねて玩でんや
東山桂枝芳 東山 桂枝 芳し
明發坐盈歎 明發 坐して盈歎す

ここに描かれているのは、「金馬門」の文人が滄海のほとりにやって来て、州民の苦弊を見るに見かね、「東山」への隠棲を果たせずに嘆きに沈んでいる姿である。

もとより、彼が「すこぶる力めて政を為し」たのは事実であるし、

一方でまた彼が方外への並々ならぬ好尚を抱いていたのも事実であるから、彼が出仕と退隱との砦に迷う心情を吐露するのもしわめて自然であると言えようが、『新唐書』本伝に「(之問) 剡の溪山を窮歴し、置酒して詩を賦す。京師に流布して、人々伝誦す」と記されるように、彼の詩が京師にまで伝布したことを考え合わせると、彼は越州で京師の人士の目と反応を意識しつつ、みずからの越州情報を通してつづけていたわけであるから、彼の揺れ動く心情をそのままに理解するのは危険であろう。むしろそこには、中朝への早期復帰を願う、ある種の計算がはたらいっていたのであろう。のち、睿宗が即位すると、宋之問はさらに欽州へと遠ざけられる。『唐才子伝』巻一「宋之問伝」では、その理由を彼に「悛悟の心」がなかったためであると記しているが、彼の恭順の姿勢は、その意図とはうらはらに実を結ばなかったのである。

さて、「剡の溪山」を遊渉することから生まれ、京師の人士に「伝誦」された詩とはいかなるものであっただろうか。例えば「泛鏡湖南溪」詩は次の通りである。

乘興入幽棲	興に乗じて幽棲に入り
舟行日向低	舟行すれば日は低きに向とす
巖花候冬發	巖花は冬を候ひて発ぎ
谷鳥作春啼	谷鳥は春と作して啼く
沓嶂開天小	沓嶂 天を開くこと小さく
叢篁夾路迷	叢篁 道を夾みて迷はしむ
猶聞可憐處	猶は聞く憐れむべき處は
更在若耶溪	更に若耶溪に在りと

ここには、冬も暖かな越州の氣候、深い溪谷・竹叢、そして西施ゆかりの若耶溪がうたい込まれ、さながらに観光案内の絵葉書のごとく、京師の人士に越州の情報を伝えてくれる。宮廷詩人が異質の風土に接したことによって生み出された、美しく洗練された遊覽詩である。

彼の越州での作品は、「遊禹穴回出若耶」「遊法華寺」「宿雲門寺」などの遊覽詩を中心に、十五首ほどが残っている。

六

越州長史としての宋之問の治政の努力と思惑は、中朝への復帰につながらなかった。長安では景龍四年(七一〇)六月二日、かつての則天武后にならって称制しようとした韋后と、みずから皇太女になろうとした安樂公主が中宗を毒殺し、十六歳の少帝(李重茂)を立て、唐隆と改元した。同月二十日、臨淄王李隆基が羽林軍を率いて禁中に入り、韋后や安樂公主、ならびにその党与を誅し、二十四日、少帝を廃して睿宗が復辟した。そしてただちに人事移動が行われ、宋之問は再び嶺表へ流されることになった。『資治通鑑』「景雲元年(七一〇)六月」の条には、「越州長史宋之問・饒州刺史冉祖雍、韋・武に詔附せるに坐して、みな嶺表に流さる」とある。彼の越州滞在は一年未満であったことになる。流刑地が嶺南のいずれの地であるか『通鑑』には明記されていないが、両唐書本伝では欽州(広西壮族自治区欽州県)と記されている。

ところで、越州から欽州に至るには広州を経由するのが最も近いルートであるが、彼は荊州から洞庭湖を経て湘江を溯り、桂州に至っ

ている。そして、桂州ではかなり長期にわたって滞在する。これは何を意味するのか、以下、彼の詩文をもとに、彼の再度の嶺南行を追ってみよう。

まず、「在荊州重赴嶺南」絶句は次の通りである。

夢澤三秋日 夢沢 三秋の日

蒼梧一片雲 蒼梧 一片の雲

還將鵷鷺羽 還た鵷鷺の羽を將て

重入鷓鴣羣 重ねて鷓鴣の群に入る

この内容からすると、彼の二度目の嶺南流謫の旅は、秋の季節に

荊州から出発していることになる。荊州經由の理由ははっきりしない。彼にはまた「宋公宅送寧諫議」と題する詩があり、江陵にある宋玉の故宅にて諫議大夫の寧某に送別する作品であるが、この季節も秋であるから、「在荊州重赴嶺南」詩とは同じ時期のものと考えられる。この作品ではみずからの嶺南再流謫に触れていない。こうした事情を勘案すると、おそらく彼は越州長史として用務を帯びて荊州に至り、そこで再流謫の命を受けたのであろう。

彼は嶺南に旅立つにあたり、「初発荊州府贈長史」という首聯を欠く律詩を残している。その後半は、

明主無由見 明主 見ゆるに由なく

羣公莫與言 羣公 与に言ふなし

幸君逢聖日 幸ひに 君 聖日に逢はば

何惜理虞翻 何ぞ惜しまん 虞翻を理むるを

と、わが身を三国呉の虞翻になぞらえ、荊州府長史に対して、天子に逢う機会があったら自分のことを取りなしてくれるよう頼んでいる。これも、荊州で嶺南行きの命を受けて、忽々に旅立つて行った事情を伺わせる。

宋之問は洞庭湖を経て湘江を溯上し、この秋のうちに桂州に至った。「始安秋日」は、かの地における作品である。彼は桂林の異質の風土に触れ、この地の秋の氣候が洛陽の春に似ているのを感じ入り、洛陽南郊の嵩山で方外の遊びに耽った若かりしころに思いを馳せて、「世業 黄老を事とせるに、妙年 孤り隠淪せり、帰らんか 滄海に臥せん、何物か吾が身より貴からん」と、こと志と違う現在の境遇を嘆いている。

彼は流罪の身とは言え、桂州ではかなり自由な境遇に置かれていたようで、彼は桂州の名所を遊覧し、「登逍遙樓」「桂州黃潭舜祠」などの詩を残している。のみならず、「桂州陪王都督晦日宴逍遙樓」詩に見られるように、桂州都督の一月晦日の宴にも招かれているのである。

この時の桂州都督は王峻であった。両唐書「王峻伝」によると、彼は景龍末（七〇九か七一〇前半）に桂州都督を授けられ、善政を施して州民に敬慕されていた。また、両唐書「周利貞伝」によると、先天元年（七一二）に酷吏の周利貞が広州都督となり、中書令崔湜の命を銜んで、封州に流される途次の劉幽求の暗殺を企てていた。王峻はそれを察知し、崔湜や周利貞の命令や脅迫に屈することなく劉幽求を引きとめて庇護し、ついに難を免れさせた。王峻は景龍末年からすくなくとも先天元年までは桂州都督であったわけで、宋之問はこの王峻の知遇を得て、桂州で流謫の日々を過ごしていたのである。

三月上巳の節に、宋之問は「桂州三月三日」と題する、五言八句・七言三十二句から成る長篇の詩を書いた。これは、今に至る自己の経歴を顧みた叙事詩となっている。その中で彼は、華麗のうちに過ごした宮廷生活を、

伊昔承休盼 伊昔^{ひかし} 休盼を承け
曾爲人所羨 曾て人の羨む所と爲れり
兩朝賜顏色 兩朝 顏色を賜はり
二紀陪歡宴 二紀 歡宴に陪せり

と誇らしげに語る。かつて武后・中宗の兩朝において、二十四年にわたって愛顧を承け、歡宴に侍ったと述べるのは、彼が天授元年に習芸館學士となつてから景龍三年に越州長史として外職に転ずるまで、瀧州左遷の約一年を含むものの、ほぼ二十年であるから、まづは事実に沿っている。詩は続けて、昆明池・伊闕・御苑・宮中においてさまざまな宴に侍し、得意の日々を過ごしたことを述べたあと、越州長史に左遷され、さらに再左遷されて現在の桂州に至るまでの経路を次のようにうたう。

載筆儒林多歲月 筆を儒林に載りては歲月多く
襖被文昌佐吳越 被を文昌に襖みて吳越に佐たり
越中山海高且深 越中の山海 高く且つ深く
興來無處不登臨 興來たれば処として登臨せざるなし
永和九年刺海郡 永和九年 海郡に刺たり
暮春三月醉山陰 暮春三月 山陰に酔ふ
愚謂嬉遊長似昔 愚かにも嬉遊^{とくし}長へに昔に似たりと謂ひ

不言流寓歎成今 流寓^{たうま} 歎ち今と成るを言はず

「襖被」は、寝具衣類を束ねること。『晋書』『魏舒伝』に、魏舒が尚書郎であつたとき、その才にあらざる郎官は罷免すべしとの方針が下され、彼は「それは私だ」と言つて荷物をまとめて去つたとある。宋之問は文昌都省(尚書省)吏部の考功員外郎であり、その任にあらずとして越州長史に出されたのである。彼は越州の明媚自然の中で、興にまかせて遊覧の日々を送つた。「永和九年暮春三月」は、王羲之の「蘭亭集序」に記される年月である。彼も三月三日に王羲之の故事にならつて、会稽の山陰において曲水の宴を催したであらう。しかし、蘭亭の会のような「嬉遊」がいつまでも続いてほしいという願いとはうらはらに、彼は桂州に「流寓」する今の境遇となつてしまつたのである。

続けて彼は桂州の上巳の節句の盛況を描写し、洛陽の家族とは音信もとだえ、故園での曲水の祓除もいつになるか見通しのたないことを嘆き、

逐伴誰憐合浦葉 逐伴 誰か憐れまん 合浦の葉
思歸豈食桂江魚 思歸 豈に食はんや桂江の魚
不求漢使金囊贈 漢使金囊の贈を求めず
願得佳人錦字書 願はくは佳人錦字の書を得ん

と述べてこの詩を結んでいる。「合浦葉」は、『太平御覧』巻九五七「木部・杉」の条に劉欣期の「交州記」を引き、合浦の東の杉の葉が風に乗つて洛陽城内に入つたという話をのせる。「漢使金囊の贈」は、『史記』『陸賈伝』にある、漢の高祖の使者として南越に赴

いた陸賈が、王の尉佗の飲得を受け、宝玉と千金を贈られたという故事にもとづく。「佳人錦字の書」は、『晋書』『寶滔妻蘇氏伝』にある、前秦の秦州刺史寶滔が流沙の地に左遷されたとき、妻の蘇氏が錦に回文詩を織り込んで夫に贈ったという故事にもとづく。彼は洛陽の故園に帰りたい気持ちに迫られて桂江の魚も喉を通らず、妻からの便りを何物にも替え難いものとして待ちわびているのである。

一方、彼は修史学士の呉兢に書状を送っている。「在桂州与修史学士呉兢書」がそれである。彼はその中で、炎荒・魍魎・離題・颶風・饑饉・毒瘴の劣悪な風土に降黜せられた自分は、「心は神理に憑りて、実に生還を冀ふも、関は鬼門と号し、常に死別を憂ふ」るありさまであると訴える。そして、自己の流謫に係る事情については、思いがけないことに、一人が自分を毀訴したら、衆人も争って喧伝し、ついに虚声によって真の罪を加えられたが、幸いに皇明の昭有によって死罪を免れたのだと経緯を語り、さらに、皇明に上答するすべのない自分は、「松竹の操・金石の堅」を持ち、衆人の「謗議」に雷同することをしなかった呉兢にすがって、弁明を計るしかないことを述べる。全文に切迫した感情が漲るが、とりわけ、

遠識古人之懷、敢申窮鳥之請。如季布之諾、乃重於黄金、延陵之許、竟懸於寶劍。生負食花之惠、死効結草之誠。刺血爲書、萬不抒一。

という表現には、悲壮な趣きが漂っている。しかし、呉兢に朝廷への取りなしを懇願するこの書状には、二度にわたって嶺表に流されるに至ったみずからの行状について、全く改悛の言を記していない。「皇明は昭有せられたのに、衆人の毀謗によって自分は降謫され

た」という弁明は、かつて彼が瀧州に流された道中の言と全く同じである。こうした自己正当化の発言からすれば、仮に呉兢がこの書状を睿宗の上覧に供したとしても、恩赦を被ることはあり得なかったであろう。

さて、宋之問は景雲元年（七一〇）秋に桂州に至ったのち、前述した「桂州三月三日」の詩があるところから、桂州で最も短くとも半年間を過ごしたのは確実である。彼はその後どうなったのであろうか。『新唐書』本伝では、睿宗が即位したのち、宋之問は欽州に流される途上、冉祖雍とともに桂州で死を賜わったと言う。また、『旧唐書』『周利貞伝』には、玄宗が正位した（先天元年八月）とき、周利貞は薛季昶・宋之問とともに桂州駅にて死を賜わったという記事がある。両伝は宋之問の桂州賜死説においては共通するが、その時期、ならびにともに刑死した人物に食い違いがある。そこで次に両伝の記事に検討を加えることにする。

まず、『旧唐書』『周利貞伝』の方を先に取り上げる。彼は武三思の「五狗」のひとりである酷吏で、『新唐書』本伝によると、彼は神龍二年七月に武三思と自己の内兄にあたる崔湜の意を承け、張易之兄弟を打倒した敬暉・桓彦範・袁恕己らを暗殺する。そして前述したように、先天初年には広州都督となつて、崔湜の密命により劉幽求を暗殺しようとして、桂州都督の王峻に阻まれている。のち、開元年間には、涪州刺史・珍州司馬・辰州長史・邕州長史と左遷され続け、ついに梧州で死を賜わった。彼は玄宗の開元年間のかんりの時期まで生きたことになり、『旧唐書』本伝の記述と大幅に食い違ふが、『新唐書』の記事は詳密に彼の足跡を記しており、信憑性が高い。また、薛季昶は両唐書に本伝があり、『旧唐書』では「良吏」に列せられている。彼は張易之兄弟を誅した功により戸部侍郎となり、敬

暉らに武三思をも殺すよう勧めたが従われず、敬暉らが武三思に暗殺されるに及んで、儋州司馬に左遷され、薬を仰いで死んだ。『資治通鑑』によれば、それは神龍二年（七〇六）七月のことである。また、睿宗が即位したのち、薛季昶に左御史大夫を追贈し、一子に官を与えたと両唐書本伝に記される。これらからすると、周利貞と薛季昶が玄宗の正位ののちに桂州で死を賜ったという『旧唐書』『周利貞伝』の記載は事実でないことになり、彼らとともに宋之問も死を賜ったというのも、きわめて信憑性が低くなる。

次に『新唐書』『宋之問伝』の、冉祖雍とともに桂州で死を賜ったという説を見てみよう。両唐書「王同皎伝」にはともに睿宗が即位したのち王同皎の官爵を復し、冉祖雍・李俊らを誅したとある。王同皎が張仲之らと武三思暗殺を謀り、冉祖雍・李俊、宋之遜・宋之問らの密告によって刑死したことは、すでに本稿上篇で述べた。

『資治通鑑』によれば、その王同皎の官爵を復したのは景雲元年（七一〇）十一月であり、王同皎の名誉回復は冉祖雍・李俊らの処刑と前後して行われたと見るのが自然であるから、彼らの処刑は景雲元年十一月前後と考えてよいだろう。宋之問も王同皎事件の密告者のひとりであるから、彼らと同時に処刑されても不思議はないのであるが、そのころ彼は桂州におり、「桂州三月三日」の詩が示すように、景雲二年三月には健在であったのだから、彼が冉祖雍とともに処刑されたとは考えにくいし、現に、「王同皎伝」の記述には冉祖雍と李俊らが誅されたとあるものの、宋之問の名は出てこない。では、『新唐書』『宋之問伝』の、冉祖雍・宋之問の桂州賜死説はどのように見るべきなのか。

同伝には賜死の詔を得た冉祖雍と宋之問の逸話が次のように記されている。

之問得詔震汗、東西歩、不引決。祖雍請使者曰、「之問有妻子、幸聽訣。」使者許之。而之問荒悸不能處家事。祖雍怒曰、「與公俱負國家當死、奈何遲回邪。」乃飲食洗沐就死。祖雍、江夏王道宗甥、及進士第、有名于時。

この逸話は、死に臨んでの宋之問と冉祖雍の態度の相違をことさらに強調していると読める。とりわけ冉祖雍が江夏王の甥であった旨の記述は、彼の血統の正しさを示し、その潔い態度を際立たせるのに効果的である。しかし冉祖雍は、前述したように王同皎や張仲之の謀議を武三思に密告し、その功によって侍御史となり、武三思の「五狗」のメンバーとなった人物である。『新唐書』『桓彦範伝』に付された「盧襲秀伝」によると、神龍二年七月、監察御史であった盧襲秀が、南方に流謫された敬暉・桓彦範と友善であった罪により、刑部侍郎冉祖雍の按問を受けた。盧襲秀は怒色あらわに自白を迫る冉祖雍に屈せず、逆に、「如し独り襲秀を殺さば、恐らく公は高枕して瞑るを得ざらん」と脅かした。冉祖雍は顔色動揺して盧襲秀の手を握り、「まさに公を活かすべし」と述べてついに罪しなかったという。

冉祖雍には本伝がないのでこれ以上のことは不明であるが、これらの事実から判断する限り、さきの逸話に記されるように、死に臨んでうろたえる宋之問とは対称的に冉祖雍が毅然として死に就いたとは信じがたいのである。この逸話は何を典拠として『新唐書』に引かれたか不明であるが、宋之問の往生際の悪さを強調する、きわめて説話的色彩の濃いものと言ってよい。さらにこの逸話で不可思議なのは、冉祖雍が勅使に対して、宋之問には妻子がいるから訣別する時間を与えるよう懇請した件りである。前に引いた「桂州三月

三日」詩に見られるように、宋之問は妻子を故郷に残してあったのである。

これらの事情を勘案すると、宋之問が桂州で死を賜ったという話は、不確実なものとなってくる。加えて、彼には「下桂江鼎黎壁」「下桂江龍目灘」「経梧州」「発藤州」という詩が残されており、これらは、彼が桂州から舟で漓江・桂江を下って梧州に出、潯江を溯って藤州（广西壮族自治区藤県）に至り、さらにそこを出発して西行する経路を示している。これは欽州に至る道程であり、しかも、初回の瀧州流謫のルートと重複しない。となると、『新唐書』本伝の桂州賜死説は誤りで、『旧唐書』本伝の欽州賜死説が正しいということになる。

そもそも、越州から欽州に流されるのに、荊州・桂州を経由するのはいかにも不自然である。そこで前述したように、越州長史として荊州府に使いし、その用務先の荊州で嶺南再配流の命を受け、そのまま旅立ったのであると想定したのだが、もし荊州で欽州配流の命を受けたのであれば、途中の桂州でさきに見たように半年間も滞在するのは、これもまた不自然と言わなければならない。

そこで、次のような推測が成り立つであろう。宋之問は睿宗が即位したおりに越州から桂州に流され、そしてさらに欽州に再流謫されて、そこで死を賜ったのである。この考え方に立つと、彼が桂州に最も短くとも半年間滞在したこと、欽州への道程を示すと思われる詩が現在することについての説明が可能になる。桂州滞在が長期にわたり、欽州に至ってただちに死を賜わっているところから桂州賜死説が生まれ、それをもとに、冉祖雍との臨終の説話が生まれたのであろう。

それでは宋之問が欽州で死んだのはいつのことであろうか。彼が

桂州からさらに欽州へ配流されるには、それなりの政局の転換があったと想像される。

先天元年（七一二）八月、玄宗は睿宗の退位を承けて皇帝の位に即いた。しかし、軍国の大事は上皇となった睿宗が握っており、また、宰相には太平公主の党与が多く、玄宗はきわめて不安定な地位にあった。翌二年、太平派は玄宗を廃して兄の宋王李成器を立てようと謀るに至った。そして、常元楷や李慈が七月四日を期して羽林軍を率いて玄宗打倒の軍事行動を起こす手はずを整えたが、その前日、玄宗側の緊急処置によって事は未然に終わり、玄宗は上皇から軍国の政刑の委譲を受けて権力体制を確立した。この政変で太平公主・竇懷貞・蕭至忠・常元楷らは誅せられ、太平公主に私侍した崔湜や盧藏用らは嶺南に流された。このとき、先天二年七月である。

『旧唐書』「宋之問伝」には、「先天中、死を徙所に賜はる」とあるが、宋之問もこの政変の余波を受けて、桂州からさらに欽州に移され、死を賜ったのではあるまいか。その時期は、彼の現在する最後の詩と考えられる「発藤州」に、「舟を泛べて雁渚に依る」「露は千花の気を衰はす」という句があるところから、先天二年（七二三）秋から冬にかけてであろう。とすると、彼が桂州にいたのは、約二年間のこととなる。

桂州から欽州への再流謫の旅で、彼はみずからの心情を次のようにうたう。

舟子怯桂水	舟子	桂水に怯え
最言斯路難	最言す	斯の路の難きを
吾生抱忠信	吾が生	忠信を抱きたれば
吟嘯自安閑	吟嘯して	自ら安閑たり

旦別已千歲 旦に別れて 已に千歳
夜愁勞萬端 夜の愁ひ 万端を勞す

〔下桂江縣黎壁〕

揮袂日凡幾 袂を揮ふこと日に凡そ幾たびぞ
我行途已千 我が行 途は已に千なり
暝投蒼梧郡 暝て蒼梧郡に投じなば
愁枕白雲眠 愁ひて白雲に枕して眠らん

〔下桂江龍目灘〕

丹心江北死 丹心 江北に死し
白髮嶺南生 白髮 嶺南に生ず
魑魅天邊國 魑魅 天辺の国
窮愁海上城 窮愁 海上の城
勞歌意無限 勞歌 意 限りなし
今日爲誰明 今日 誰が爲に明らめん

〔發藤州〕

先行きに対する言い表わしような不安は、「忠信を抱いてい
る」と自己暗示をかけ、「袂を揮つて自己を励ましてみたところで、
拭い去ることはできない。桂水の驚濤にもまれる小舟は、転変の生
涯をたどった宋之問自身を暗喩しているかのようである。
彼は先天二年の秋から冬に、欽州でその生涯を閉じた。五十八歳
であった。この年の十二月、世は開元と改められ、太平の世の幕が
開く。と同時に、文学史における初唐は、終りを告げるのである。

七

宋之問は逸話に富む人物である。「奪錦袍」の故事(『隋唐嘉話』
卷下)、武后が「之問は才はあるが口過(齒疾)がひどい」と評した
話(『本事詩』「怨憤」、冉祖雍とともに死に臨んでうろたえた話(『新
唐書』「宋之問傳」)はすでに本文に引用したが、このほかに、

景龍三年正月晦日、中宗は昆明池に宴して群臣に詩を賦せしめ、
上官昭容に品評させた。昭容は綵楼上から落選作を投下してゆき、
最後に沈佺期和宋之問の詩箋が残った。ややしばらくして落ちて
来たのは沈佺期の作で、宋之問が僅差で第一等になった。(『全唐
詩話』卷一「上官昭容」)

宋之問が杭州の靈隱寺で作詩に詰まって苦吟していたとき、老
僧が続句を教示してくれた。翌朝その僧は姿を消したが、それは
かつて武后打倒の軍事行動に参加して行方不明になっていた駱賓
王であった。(『本事詩』「徵異」)

宋之問が甥の劉希夷の「年年歲歲花相似、歳歳年年人不同」の
句を譲ってもらおうとして拒否され、それを恨んで土囊で劉希夷
を圧殺した。(『劉賓客嘉話錄』)

などがある。右の駱賓王が登場する話は、文中で老僧が「少年よ、
夜夕久しくして寐ねず、吟諷して甚だ苦しめるは何ぞや」と声をか
けたことになっている。本稿上篇で述べた通り、駱賓王と宋之問に
は親交があり、また、駱賓王が失踪した文明元年(六八四)の時点
でさえ、宋之問は二十九歳であったのだから、この話は宋之問が越

州に左遷され靈隱寺を訪れた事実からませた虚構である。次の劉希夷を庄殺したという話も、『大唐新語』巻八には「(代悲白頭翁)の」詩成りて未だ周ならずして、奸の殺す所と為る。或は宋之間これを害すと云ふ」とあり、宋之間が殺害したというのは一説として載せるのみである。土囊で庄殺するというのはきわめて奇怪な殺害方法であるから、それが事実であれば、『大唐新語』に書きとめられていてもよさそうなものである。

こうして見ると、宋之間に関する逸話には、説話性の高いものが多いということになる。彼の逸話が説話化していくのは、彼がそれだけ著名であったのを示すが、彼が著名であったのは、実に、一方では華麗で洗練された詩を作りながら、他方では権倖に阿諛追従して保身に汲々とするという、この隔絶した両面性による。それが彼を話題の人物に押し上げたのである。

彼はかつて越州への左遷の旅の途上、丹徒県令の李某に対して「子の良媒に遇ふを期す」という言葉を贈ったが、この「良媒」こそが、彼の栄達の手がかりであった。彼は権力への欲望が渦を巻く宮廷において、張易之兄弟、武三思父子、韋后、太平公主、安樂公主と、良媒を求めての遍歴を繰り返した。役の願望は結果としてことごとく失敗に終わったが、彼の一生は、詩才を立身の拠りどころとし、良媒にすがって栄達をはかろうとしたものと言ってよい。

彼の宮廷詩人としての名声は朝野に喧伝された。その作品は侍宴応制のもののみならず、『旧唐書』本伝に「之間 再び竄謫を被り、途に江・嶺を経て、有る所の篇詠は遠近に伝布す」と記されるように、流謫中の作品までもが人々に諷誦されたのである。他人に読まれることを前提とする作詩環境は、集団的文芸が盛行したこの時期、宮廷詩人に宿命づけられたものとは言え、個人的な感情や信念を自

由に詩に形象化する上で、重い束縛を強いられる。彼の場合、宮廷を離れた流謫の境遇においても、常に他人の視線がちらついているように思われる。「晚泊湘江」詩は、彼の二度目の嶺南流謫のおりに、荊州を発って湘江を溯上して桂州に向かう途上の作品であるが、そこでは次のようにうたわれている。

五嶺 恹惶客	五嶺 恹惶の客
三湘 顚顚顔	三湘 顚顚の顔
況復秋雨霽	況んや復た秋雨霽 ^あ れて
表裏見衡山	表裏に衡山を見るをや
路遂鵬南轉	路は鵬を逐ひて南轉するも
心依雁北還	心は雁に依りて北還せんとす
唯餘望鄉淚	唯だ余す 望郷の涙
更染竹成斑	更に竹を染めて斑と成す

この作品には再び嶺南に赴く深い悲しみがこめられてはいるが、その悲しみの深さそのものをうたおうとする以前に、それをどのように表現するかに重点が置かれている。総じて、嶺南や越州における流謫中の作品には、北方とは異質の風土が饒舌に描かれることが多い。その異質の風土は、その中に難渋の日々を送る作者の姿とともに京師の人士に伝えられるのである。彼の流謫中の作品は、彼が京師の人士に対して提供する、みずからに関する情報でもあったのである。彼はそれによって、みずからの中朝への復帰を願ったのであった。

彼は二度にわたって嶺表に投ぜられた。しかし、その体験も、彼の文学に根本的な変化を生じさせるには至らなかった。彼にとつて、

文学は自己の信念や主張を託すべきものではなかったのである。彼がかつて青年時代に邂逅し親しく敬慕した初唐の四傑、ならびに方外の親交を結んだ陳子昂には、それなりの文学的主張があった。その主張の個人差と、実作における成就度の問題はあるにしても、彼らの文学的主張はおおむね齊梁詩風を否定するものであった。ただ彼らは宋之問とちがって宮廷文壇の外に身を置く者たちであり、朝官たることを求めて声高に自己の主張を開陳しなければならぬ事情があった。彼らの文学論は、文学の理想と自分たちの将来とを重ね合わせたものだったのである。それに対して宋之問は比較的容易に宮廷詩人の地位を手に入れ、榮譽ある現実をそのままに受容して作詩に専念すればよかった。たとえ彼が配流の境遇にいても、中朝への復帰の願望が消滅しないかぎり、彼は自己の文学の方向を变换する必要がなかったことになる。加えて彼は、四傑や陳子昂の不遇な生涯を熟知していた。彼は「辞業」と「官成」（ともに「祭杜学士審言文」）の両立を求め、詩の才能を抛りどころとして、与えられた榮譽ある地位にすがりつこうとしたのである。彼は思想信念によってではなく、感性和上昇指向性によって行動する人物なのであった。彼はみずからの感性によって宮廷詩人としての名声を勝ち得た。そして、宮廷を離れても宮廷詩人であり続けようとした。彼の生涯は、まさに「文士」「詞人」としてのそれであったと言えるのである。

〔注〕

- （1） 安東俊六「初唐詩の作者・作品に関する異説について——宋之問の詩のばあい——」『中国文学論集』第二号、一九七一年五月、九州大学
- （2） 安東氏前掲論文。
- （3） 『全唐詩』卷一一〇では、この詩の作者を一に張譔とも記すが、彼もま

た宋之問が考功員外郎であった時の進士登第者である。
 （4） 『旧唐書』「武延秀伝」に「文士宋之問沈佺期云々」と言い、同「武崇訓伝」に「詞人沈佺期・宋之問云々」とある。

（本学教授 函館分校）